

## 日韓共同インターゼミ “環境問題についてのワークショップ”

環境情報学部 3 年 渡辺吉鎔研究室 朝鮮語 SA

菅岩 誉広 70644909 t06490ts@sfc.keio.ac.jp

渡辺研究室参加者：計 7 名

### 1. 導入

毎年夏季と冬季の年に二度、我々慶應義塾大学の渡辺吉鎔研究会では韓国の高麗大学日本語学科の有志の学生たちと延世大学の政治外交学部の学生たちと有益な国際交流の場として毎年テーマを決め、それに基づいたプレゼンテーションやディスカッションを行っている。

今年のテーマは環境問題となり、国土が狭くエネルギー資源も乏しい両国においてお互いの国の環境政策や個人レベルでの身近な刻々と進行している環境問題に対する問題意識や考えを共有する非常に有意義な日韓共同インターゼミとなった。

### 2. 研究背景

2008 年春季朝鮮語海外研修において、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなどの店で買い物をした際に、日本では当たり前のように貰えるビニール袋が韓国では有料（1 枚 50 ウォン）となっていたことにとても驚いた。また、韓国社会で一般化されているビニール袋の有料化に見られる、韓国国内での環境に対する意識が国民の間に浸透していると痛感した。

ビニール袋以外にも、日本では木材資源で作られている爪楊枝も韓国では、そのまま土に還るデンプン素材で作られているなど、さまざまな方法により、環境問題について真剣に見直しをしていることが韓国社会の活動によって知ることが出来た。私たち日本人が今一度環境問題を見つめなおすためにも、韓国で身近に感じることが出来たビニール袋の有料化から環境問題を考え

る必要があるのではないのか。このような問題意識より、今回のインターゼミのテーマが決められた。

### 3. 目標・手法

このインターゼミの目標は、日韓の学生たちの意識の違いを知ることである。そのため、日本と韓国、双方の国の環境に対する現状・政策・民間での取り組みなどをプレゼンテーションによって理解した上で、日韓の学生の環境問題に対する考えがどのようなものであるのかということ調べるために数名の班に分かれてワークショップを行い、最後にその内容を発表しようという形式を取った。

### 4. 日韓共同インターゼミ活動報告

(1)高麗大学 日本語学科

日時：2008.9.20 16:00~18:00

場所：高麗大学

参加者：日本語学科の学生 計 10 名



図 1 高麗大学でのプレゼンテーション

使用言語：日本語

内容：全 2 部構成されており、日韓の環境政策に対する理解を深めるため、第 1 部では図 1 のように慶応大学がプレゼンテーシ

ョンを行い、日本でのエコブームによる個人レベルでの身近な改善余地の模索から日韓のビニール袋の現状について発表し、最終的に日本におけるビニール袋有料化の導入に向けての政策提言を行った。

また第2部では、図2のようにワークショップにおいて以下3つの質問を行った。

- ①ビニール袋に関して自分が日本人だったら、韓国人だったらどうしますか？
- ②身の回りでしていること、出来ることは？
- ③逆に身の回りで出来ないことは？自分の手ではどうしようもないことは？



図2 延世大学でのディスカッション

(2)延世大学 政治外交学科

日時：2008.9.21 17:00~19:00

場所：延世大学

参加者：政治外交学科の学生 計11名

使用言語：韓国語・英語

内容：上記とほぼ同様のもの。

## 5. 結論

第2部で行われたワークショップに対する各質問の結論。

- ① もし韓国人が日本人だったら、
  - ・羨ましいので貰うと思う
  - ・ 無料なので貰う
- もし日本人が韓国人だったら、
  - ・ 大学生だと鞆があるので貰わないと思う

・ 今まで無料で貰っていたものに対してお金を払いたくない

② 身の回りでしていること、出来ること

- ・ ゴミの分別
  - ・ ビニール製の傘入れを再利用する
  - ・ 残った油を回収し、その油で石鹸を作り、その石鹸を協力してくれた人に配る
- ③ 身の回りで出来ないこと、自分の手ではどうしようもないこと
- ・ 国家の政策や法律に関わること
  - ・ 顧客の意識（特に飲食店）
  - ・ 産業用の電気（工場、繁華街など）

## 6. 最後に

高麗大学と延世大学とのインターゼミにおけるプレゼンテーションやワークショップを通じて感じたことは、日本人と韓国人では国の違いが意識の違いとして表れるので、どうしても環境やビニール袋削減に関する概念が根本的な部分でずれていることが判明した。しかし、総括的に言えるのはどんな意識の違いではあれ、個人としての環境問題に対する考えや姿勢は両国でも前向きという点で共通していたことである。

このインターゼミを通して、今回参加した日韓の学生は改めて環境を見つめ直すと共に、今出来る最低限のことを各々が行うことで最終的な環境問題の解決に繋がっていくと強く信じている。

## 7. 謝辞

今回のインターゼミは高麗大学と延世大学の学生をはじめ、普段研究会においてご教示いただいている渡辺吉鎔教授、また、インターゼミを金銭的にサポートしていただいた湘南藤沢学会シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金に深く感謝致します。今後とも御指導御鞭撻賜りますようによろしく御願ひ致します。